

こども園における自己評価

八尾市立志紀おおぞらこども園

4: 十分達成している 3: ほぼ達成している 2: 検討を要する 1: 改善を要する

項目	内容	評価	備考欄
教育・保育目標について	・目標の具体化に向け、乳幼児の実態を踏まえた重点目標を設定しているか	4	・幼児教育研究1年目として『子どもも大人も一人ひとりが主人公 ～安心と挑戦を支え合うチームおおぞら～』を研究テーマにこども園にかかわる全職員が思いを共有しながら保育を積み重ねてきた。また、保護者や地域にも情報発信し、子どもの育ちをともに支え合うようにした。
	・目標は、各施設や地域の特徴を生かしているか	4	
	・目標は、社会の要請や保護者の願いを反映しているか	4	
	・目標は、前年度の反省を活かしながら全職員で検討し、かつ共通理解を図っているか	4	
教育・保育内容について	・指導計画は、教育保育計画に基づき作成しているか	4	・各学年の『育てたい子ども像』を念頭におき、指導計画に落とし込みながら、1年間目標をたてて保育した。また、その『育てたい子ども像』に近づくためには何を大切に保育していくのかを担当間で語り合い、保育の方向性を共通理解し保育実践に努めた。
	・毎月の指導計画は、乳幼児の実態に即して作成しているか	4	
	・月ごとに指導計画の評価・見直しをし、その結果を指導計画に反映させているか	4	
	・1日の流れ（ディリープログラム等）は、前日の評価をもとに日々改善に努めているか	4	・子どもたちの“やってみよう(挑戦)”を支えるには“安心＝アタッチメント”が基盤にあり、信頼を寄せる保育者とのあたたかいかわりを得ることで、一歩踏み出し子どもたちの挑戦する姿につながっていくと考え、こども家庭庁【はじめの100か月の育ちビジョン】にある『安心と挑戦の循環』をキーワードに保育実践を進めてきた。また、このキーワードを意識して日々保育したことで、より保育内容を深く考えるようになり、保育者の“保育を学ぶ”姿勢へつながった。
	・行事のねらいに沿った計画を立て、適切に実施しているか	4	
	・幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく援助・支援を適切に行っているか	4	・月案、週案、保育指導案、保育ダイアリーの中に『育てたい子ども像』や『安心と挑戦の循環』を反映させるようにしたことで、子どもの育ちが見える化された。
	・自主性や主体性を重んじて生活習慣が身につくようにしているか	4	
	・子どもの姿を見取り、興味関心に応じた教育・保育を行っているか	4	
	・子どもの発達や成長につながるよう環境の構成や援助の工夫をしているか	4	
	・同僚性を発揮し、保育のねらいや育てたい力を話し合い実践しているか	4	
	・素材・用具を適切に活用しているか	4	
	・保育サポートのための環境が整備され、保育の内容や方法に配慮しているか	4	
・子どもの人権に十分配慮し、互いに尊重する心を育てているか	4		

項目	内容	評価	備考欄
健康・安全について	・食育を通して、子どもたちが楽しく食べ、食べる意欲が育つように工夫しているか	4	<p>・自分たちで育てた野菜をクッキング活動に取り入れ、食への関心につなげた。家庭でも野菜に関心をもつきっかけになり、保護者からも好評な意見があった。</p> <p>・野菜の皮むきやふさ分けなどのお手伝い活動を通して、調理員や栄養士と親しみをもちかわりを深めた。</p> <p>・毎月、計画的に避難訓練(地震、火災、防犯)を実施し、子どもたちの安全と安心につながるようにした。また、全職員が、消火器と消火ホースの場所及び使用の方法について共有し、いざという時の行動ができるようにした。</p>
	・食物アレルギーは、個別に配慮して食事を提供しているか	4	
	・年齢に合った保健対策（発育・発達の把握、SIDS予防、感染症対策等）を講じているか	4	
	・健康・安全な生活に必要な習慣や態度が身につくよう取り組んでいるか また家庭への啓発を行っているか	4	
	・避難訓練や交通安全指導を、計画に基づいて適切に実施しているか	4	
	・乳幼児の安全確保のため、家庭・地域社会・関係機関等と連携を図っているか	4	
職員 の 資 質 向 上	・職員の研修ニーズを把握し、職員に必要な研修機会を確保しているか	4	<p>・全保育者が、園内及び園外の研究会や研修会に一度は参加するように体制をとった。そのことで、一人ひとりの知識が増し、学ぶ姿勢をもつことにつながった。また、参加した職員が園内で伝達し学び合うことを大切にすることで、園全体の保育の質の底上げを図った。</p>
	・研究主題は、教育・保育目標の具現化につながるものであるか	4	
	・研究・研修の成果を日常の保育に生かし、乳幼児の育ちに反映させているか	4	
	・各種研究会、研修会、講習会での内容を園内に還元しているか	4	
職員 運 営 管 理 の 実 施	・職務内容や相互の連携に必要な情報の共有方法が明確で、協働できる体制になっているか	4	<p>・デジタル機器を活用し、会議の効率化を図ったり、あらかじめ時程を決め、内容を精査して参画し、会議の時間短縮に努めた。</p> <p>・公務員としての職責を果たすように、普段から意識をもって行動するようになった。</p>
	・職員を適材適所に配置し、係や仕事の分担が能率的に行える組織になっているか	4	
	・各種会議や打合せを適切かつ効率的に進めているか	3	
	・職員は公務員としての責務や職場での立場を理解し、協力を惜しむことなく施設の運営にかかわっているか	4	
	・運営改善の課題について把握し、計画的な取り組みを行うとともに、定期的な検証・見直しをしているか	4	
守 秘 義 務 の 遵 守	・乳幼児や保護者に関する個人情報を適正に取り扱っているか	4	<p>・個人情報の取り扱いについては、問題なく適切に取り扱った。なお、閲覧するときは職員室で行い、鍵のかかる場所に保存した。</p>
	・公文書收受、発送、処理を適切に行っているか	4	
	・各表簿は、適切に作成、処理しているか	4	

項目	内容	評価	備考欄	
開かれたこども園づくり	施設・地域との交流や連携	・他施設等との年間交流計画は、保育目標や課題に添ったものになっているか	4	・近隣の小学校や中学校と計画的に交流を行った。また、園児や生徒だけでなく、子どもたちの情報共有や互いの授業見学、保育参観、研究保育など互いに理解を深められるように職員同士の情報交換も積極的に行った。 ・地域にある図書館や公共施設を活用し、地域に開かれたこども園をめざした。
		・地域の様々な人と触れ合う中で、乳幼児が楽しく過ごし、充実感を味わうことができるような配慮や援助・支援を行っているか	4	
		・担当者同士が、事前打ち合わせや活動の振り返りを行い、互惠性のある交流になるように工夫しているか。	4	
		・合同研修や授業・保育の見学を通して互いの教育・保育に対して理解を深めているか	4	
		・乳幼児の興味や関心に基づいて地域の施設等を利用し、保育に活かしてしているか	4	
		・地域の行事に積極的に参加し、地域の文化や生活に触れているか	3	
		・子育て支援機関と情報共有しながら、連携をとっているか	4	
	子育て支援	・施設を開放し、地域の親子が遊べる場や機会の提供を行なっているか	4	・地域交流(ひろば)や園庭開放などを通して、子育てに優しい園づくりに取り組んだ。また、参加された保護者とコミュニケーションをとりながら、子育てについての悩みや不安について一緒に考え思いに寄り添うように努めた。
		・職員による「育児に係る子育て相談」は充実しているか	4	
		・医療機関、児童相談所等の専門機関と連携を図り、保護者にとって必要な情報を提供しているか	4	
		・一時預かり保育の利用者にとって安心できる場になるよう努めているか	4	
	情報の発信	・園だよりやクラスだより、ホームページ等で教育・保育内容を発信し、理解をしてもらうよう努めているか	4	・ホームページを活用し、保護者や地域の方に情報発信を行った。また、地域会議で園の教育・保育を理解を得るよう情報発信に努めた。
		・地域の連絡会等でこども園の取り組みを発信するとともに、地域施設の事業について知り、教育・保育の充実に役立てているか	4	
	外部評価	・第三者評価を導入し、施設運営に反映しているか	4	・保護者アンケートを園運営に生かし第三者委員を窓口に開かれた園運営に取り組んだ。
・地域や保護者の意見を施設運営に反映しているか		4		
施設・設備	・施設内外の設備や遊具の安全点検を計画的に行っているか	4	・担当者が、安全チェックシートに添って、毎月園内を巡視し、危険箇所や壊れたところがないかどうか安全点検を行った。また、その場で修理・改修したり、営繕依頼を出したりして安全に使用できるように努めた。また、職員会議で点検したことを知らせ施設の安全確保に努めた。	
	・遊具や用具等を、活用しやすいように整理、保管しているか	4		
	・災害や不審者等に対応する整備を行っているか	4		
	・掲示板、掲示場所等を適切かつ効果的に活用しているか	4		
経理出納	・各種会計を適正かつ適切に処理しているか	4	・適切に対応している。	

成果

- 子どもたち一人ひとりの“もっとやりたい”“やってみよう”という気持ちを育むためには、安心＝アタッチメントが基盤になることを職員間で共有し保育実践に努めた。また、こども家庭庁が定める『はじめの100か月の育ちビジョン』より『安心と挑戦の循環』というワードをキーワードにし、保育者一人ひとりが同じベクトルで保育したことで、より子どもたちの育ちが具現化され職員同士の対話が深まった。
- 学識者に研究に参画していただき、より具体的な環境づくりや思いに寄り添った指導助言を受けたことで、職員のモチベーションを高めることができた。
- 保育指導案の様式を見直し『育てたい子ども像』と『安心と挑戦を支える保育者の願い』などを指導案に落とし込んだことで、より意識をもって保育を進めていった。また、保育指導案を立案する前に学年の担任が集まって子どもの実態や課題を話し合ったことが、よりチーム力が増すきっかけとなった。
- 研究推進会議を親しみやすく参加しやすいように『おおぞらっこ会議』と名づけ、職員全員が参画意識をもって参加できるようにした。
- 『実習体験』や『子ども体験』を取り入れ、参加した保育者や受け入れた担任が感じたことや学んだことを伝え合い、保育者自身の自己肯定感を高め、自分の保育に生かす機会にした。
- 園長が発行する『おおぞらっこニュース』を通じて、保育者の思いや幼児教育の大切さを伝えるツールとした。子どもたちの園での様子や担任が保育で大切にしている視点、行事の様子、子育て支援情報等を積極的に発信するようになった。保護者アンケートからも概ね良好な感想をいただき、成果を感じた。
- 5歳児を対象に小学校の栄養士より“給食の話”を聞いたり、実際に給食を食べている様子を見学したりした。また、同じ小学校区にある私立保育園の5歳児とも交流し就学への期待と安心につながるようにした。
- 保護者との連絡ツールにICTを活用した。保護者からも「自宅で落ち着いた時間に確認できる」「読んでからお迎えにくるので、実際の様子とリンクでき子どもとの会話がはずむ」「欠席しても園の情報を得ることができる」など良好な意見があった。

課題

- 全職員が、園内外の研修会に参加できるように体制を整えたが、当日のシフト調整がとれず希望していた研修会に参加できないことがあった。
- 園のホームページをアップロードする頻度が低かったため、次年度は担当者が責任をもち取り組めるようにしていく。
- 研究推進会議(おおぞらっこ会議)では、限られた時間の中で全員が主体的に発言する難しさがあった。効率よく話をするスキルを、司会者・参加者ともにもつ必要があると感じた。次年度は、この点にスポットをあてて一人ひとりのスキルアップを目ざしていきたい。

改善点

- チーム力を高めるために、うわべだけでなく本音で話し合う機会を大切にしたい。言いにくいことも言い合うことで、改善点が見い出され、よりチーム力が増した。チームは同じベクトルで進む仲間という意識をもち、全職員で対話を重ねながら真摯に保育に向き合うことを今後も、積み重ねていきたい。
- 職員向けに実施した『人権擁護のチェックシート』では、職員一人ひとりが自分の保育を振り返りながら項目ごとにチェックを行った。そのチェック項目を人権の視点で深く考える機会をつくることができなかったため、次年度は、一人ひとりの保育者がより自分の保育を見直すきっかけになるように年度途中に確認する機会を設けたい。
- 職員一人ひとりの持ち味を生かすプロジェクトを立ち上げて一定の成果を得た。次年度は新規プロジェクトを立ち上げ取り組みを広げていきたい。
- ライフワークバランスが保てるように働きかけるとともに、できるだけ超過勤務を削減できるように働き方改革に取り組んでいきたい。